

〈書評・レコード評〉

菅原洋一—^{うたびと}そは歌人（その1）

林 辰男

I

2003年、歌手がひとり古稀を迎えた。芸能生活45周年を祝った。これを機に所属するポリドール・レコードは、洗いざらいの音源をCD大全集として、BOX盤を出すと期待された（現に30周年には、「シングル・ヒット大全集～30年のあゆみ～」という3枚組を出して記念としたのである）が、意外にも新盤を出してリスナーを驚かせた。タイトルは「うたたね」。シンプルなピアノ伴奏で、限りなく出身のクラシックに近い歌曲が並び、やや本邦還りの気味もないでもないが、それでも女性ピアニストを3人代えて唄うという冒険もしている。いわゆるこういう叙情歌を唄い、しみじみとした枯淡な情趣が漂わせているわけだが、クラシックともポップスともつかない、彼独特のバリトンの詠唱である。古稀にして懐古的になるのではなく、前向きに新曲や新録音に挑むその気概には脱帽しないではいられない。曲目は次のような。

うたたね

この道	忘れな草をあなたに
からたちの花	砂山
琵琶湖周航の歌	椰子の実
あざみの歌	冬の星座
惜別の歌	月の砂漠
水色のワルツ	荒城の月
庭の千草	浜辺の歌
宵待草	赤とんぼ

Polydor POCH-1692

プログラムは全曲が若干の再録を混じえて、ほとんど新録音ばかりだが、往年の美声はもちろん声量の豊かさ、音程の確かさも変わらない。僅かに声量の衰えと高音の艶が薄くなつた。だが、それも強いて言えばの話である。

しかも、それだけでなく、所属の小澤音楽事務所が、2枚組の記念盤を独自に出した。2枚で41曲という椀飯振る舞いになっている。Disc 1はおはこの「知りたくないの」や「今日でお別れ」の他、オリジナルを21曲並べ、2では、新録もまじって20曲、CDでは彼の好む服部良一の「蘇州夜曲」や「胸の振り子」から吉田正の隠れた名曲「六本木ワルツ」まで入っていて油断できない。とても70歳の声と歌とは思われない。さらに、「初恋」も出た。これには2枚組との重複もあるが、煩をいとわず曲名を挙げておこう。

初恋

初恋	山小舎の灯
ゴンドラの唄	マロニエの木陰
カチューシャの唄	星影の小径
黄昏のビギン	蘇州夜曲
港が見える丘	緑の地平線
或る雨の午後	花言葉の唄
君待てども	TSUNAMI
新雪	忘れないわ

ZCCA1003

発売元 小澤音楽事務所

古くは大正末期のカチューシャの唄から、サザンのTSUNAMIまで、端倪すべからざる懐の深い選曲ぶりである。しかも持ち歌を敢えて一曲も入れていない。これらの曲名から歌い手は誰だろうと考えても、ちょっと想像がつかない。せいぜいひばりの名が思い浮かぶ程度だろう。プログラムからでは見当のつけようがない。それほどに多彩であつて、まことに世阿弥のいう老年の「時分の花」である。

この歌手こそわが菅原洋一である。このひとは流行歌手というよりもむしろ孤高の声楽家と呼ぶ方が本質に近くなつたかもしれない。最近ソプラノの藍川由美が古賀政男や古関裕而を歌曲として歌っているが、その逆のケースにあたる。この41曲が現在の集大成であり到達点なのだろう。収録曲は次の通りである。

なおリブレットには、菅原自身の「45周年を迎えるに当たって」という短詩が冒頭に置かれている。

振り返れば45年。

さまざまな歌に巡り合いました。

心に寄り添う懐かしい歌。

体の底まで響く歌。

蒼く遙かな海のような。

甘く、優しく、時には剛く、色めいて。

どの歌もどの歌も忘れられない歌ばかり。

今この時に思いをこめて
愛してやまない曲ばかり選んでみました。
果てない夢は、彼方まで
道はまだつづきます。

今の偽らざる心境だろう。長い歌手生活の深い感慨が読者の胸を打つ。

歌人～そはうたびと

Disc 1

知りたくないの

恋心

幸せのかたみ

愛の嵐

芽生えてそして	乳母車
誰もいない	夕焼け
潮風の中で	その手を放して
今日でお別れ	ありがとうさよなら & グラシエナ・スサーナ
星（& 菅原歌織）	愛の瞬間
愛のフィナーレ	1990年
みちゆき	アマン & シルビア
忘れな草をあなたに	風の盆
命が果てる日まで	

Disc 2

シンガーそは歌人（うたびと）	胸の振り子
春の雨	影を慕いて
あなたのすべてを	秋の砂山
哀しみのラストタンゴ	蘇州夜曲
小雨降る径	少しほは私に愛を下さい
坂の上のレストラン	許されぬ恋
アマン2（ドゥー）&園まり	しあわせ
六本木ワルツ	ひまわりの円舞曲
新妻に捧げる歌	恋すみれ
愛の讃歌	夢に抱かれて

UNIVERSAL ucz4082/3

歌謡曲ともポップスとも距離を置いた、この人独特の“歌”ばかりである。

しかし、新しい伝記も研究書も結局出ずに終わった。ひとつには彼が芸能人らしくないくらい、地味で穏和な紳士であり、スキヤンダラスな話題を提供することもないから、イエロージャーナリズムのつけ込む余地がないためである。したがって、10年前の自伝に付け加えるべきことはあまりない。ひと言、今もコンサートやレコードを通じて、旺盛な活躍ぶりを示していると付け加えれば済んでしまうからだろう。ただTV出演がほとんど

ないのは寂しい。

菅原洋一は1933（昭和8）年、兵庫県加古川市に生まれた。播州平野のただ中である。「赤とんぼ」の詩人三木露風の故郷龍野にも近い町でもある。洋一は長男で、今で言うコンビニ、当時はどの町村にもあった万屋の体である。特に播州地方は典型的な田園地帯であり、気候も温暖で、今も郷愁の溢れたひなびた土地柄であり、「赤とんぼ」や「ふるさと」の情感がぴったり来る古めかしい小城下町なのである。

少年時代から歌は好きで上手だったが、中学1年の時、自分が父の先妻の子であり、現在の母とは生ぬ仲であるという衝撃的な事実を知る。その時彼は古いタンゴを聞くことで、その衝撃を受け止め、乗り越えた。

少年時代、体が弱かったせいで、医師や薬剤師を志望し、生家の業は継がないつもりだった。高校生のころ腎臓を患って3ヶ月入院し、全快後復学したものの、その間に同級生と決定的な学力差がついてしまい、夢は潰えた。

本格化したタンゴへの愛着は、当然ながら音楽家志望に変わって、一転音大を目指し、せめて音楽教師にと考えたが、父親は猛反対だった。だが、結局はどうにか説得して初心を貫き、1952（昭和27）年国立音大声楽科に入学する。同級生には神津善行やロミ山田がいる。

当時は復興期にあったとはいえ、まだ戦争の後遺症は残っており、上京は果たしたもの、米穀通帳がないと、外食も出来なかった時代であったから、お定まりの貧乏学生である。当時の音大は私大とはいえども、芸大に倣らい、お高くとまってクラシックしか教えない習いだった。流行歌やポップスを歌うのは厳禁・御法度だったが、生活のため背に腹は代えられず、ポピュラー音楽でアルバイトを始めた。天性の声の良さは何處でも認められ、やがて専攻科に進んだ後、今度は本格的にタンゴを歌うようになっていく。

従って、彼には特定の師がいない。自分の耳と喉で、聴きながら、歌いながら、テープレコーダーを相手に、ひとりでこつこつと勉強して体得したものだ。だから、多くの歌謡曲歌手のように、作曲家の内弟子を勤めるということもなく、バンドボーイをした経験もない。始めから歌手であった。音大出のせめてもの余得である。以後タンゴバンドで歌っているうちに、ポリドールにスカウトされた。ここまでは一種のシンデレラボーイのサクセストーリーであり、これはひたすらタンゴを歌い続けた賜物でもあった。当時この分野は、藤沢嵐子がひとり抜きんでており、男声のタンゴのスターは不在で、そこへ菅原が滑り込んだ形になったのである。オルケスタ・ティピカ東京の一員になったのが、1958年。1962年には、穏和な彼としては信じられないような、波瀾万丈の結果恋愛結婚をしている。

両親に逆らった駆け落ちだったという。

この辺りから、狭義のタンゴ歌手からもっと広い意味での歌謡活動を志して、専属だったオルケスタも離れ、晴れてフリーになる。

音大出で、しかも、すでにタンゴ歌手として認められていたにもかかわらず、その安定した座を去って歌謡曲を歌う道を選んだのである。そのマネージメントを引き受けたのが親友小澤惇。ポリドールの名物女性ディレクターの“おけいさん”こと松村慶子が担当者として熱心に肩入れ、擁護し、後援した。この両者とのコラボレーションが菅原の歌手生活に与えた影響は計り知れない。

レコードデビューは、1962年だから、すでに30歳近くになっていた。当時は橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦という、いわゆる御三家全盛時代で、後のアイドルブームのはしりのような時代だった。そんな中で生き残るために、マスクやルックスで対抗できないなら、持ち歌がヒットしなければ終わりである。ポリドールでは、だからなかなか日が当たらず、首切り寸前まで追いこまれた。会社も菅原をどう使っていいのか分からなかつたのである。仕方なく、その癖のない声を買い、社歌、校歌などの制作依頼を受けた時の要員として、辛うじて首がつながったともいわれている。

だが、1965年に転機が訪れる。当時岸洋子が歌って流行っていた「恋心」を吹き込むことになり、これも新人だったなかにし礼に作詞を依頼して、男の側からの失恋の歌詞に代えたが、全然当たらず、曲は岸のヒット曲になり、彼女のスタンダードにもなった。発売の際、歌詞は違ってもA面は「恋心」で行くとして、B面をさてどうするか。ここで持ち出されたのが、カントリーウエスタンの有名なワルツ、“I really don't want to know”（H.バーンズ作詞・D. D. ロバートソン作曲）で、当時の大スター、エディ・アーノルドのヒット・ナンバーだった。親しみやすく、哀調の籠もった美しい素敵なお歌である。これになかにし礼が作詞し、「知りたくないの」とした。一番だけの短く、簡潔なものである。

あなたの過去など知りたくないの
済んでしまったことは 仕方ないじゃないの
あの人のことはわすれて欲しい
たとえこのわたしが聞いても言わないで
あなたの愛がまことなら ただそれだけで嬉しいの
ああ 愛しているから知りたくないの
早く昔のことを忘れて欲しいの

ところが、この冒頭の「過去」という単語がとても歌いにくく、菅原はなかにしに懇願し、ひと晩考えなおしてもらったが、なかにしはどうしても代えられないという。そして、怖いもの知らずの若者らしく、「あなた歌手だろ？ 何故歌えないんだ？」と言い放ったが、ここまで言われては、菅原も後に引けず、最終的にはなかにしの主張通り、「過去」はそのままになったといわれている。

これが当たらなければ首という瀬戸際で、奇跡的に現れた名曲だったが、2000枚発売に当たって、うち1000枚は菅原側で買い取るという過酷な条件を、会社側から突きつけられた。菅原はやむなくこれを呑み、1965年に、このレコードはどうやら発売に漕ぎつけた。何しろそれまで発売された6枚のレコードが、せいぜい三、四百枚しか売れなかつたというのだから仕方がない。しかも、「恋心」のB面だった。

当時、彼は高輪のホテルのナイトクラブ「トロピカル・ラウンジ」で深夜歌っていたが、この曲はそこへ通う水商売の女性から、口コミで次第に人気を得ていった。この曲には辛酸をなめてきた女心の琴線に触れる要素があったためである。そして、程なくブレイクして大ヒットする。刺身のツマ的なB面の曲が85万枚という当時としては、驚異的な売り上げを果たしたのである。これで菅原は全国的に名を知られるようになる。そして、1967年には念願の初リサイタル。

執念と努力、そしてスタッフのサポート、これらに支えられ、ついに彼はメジャーになった。「知りたくないの」に続く大ヒットは「今日でお別れ」である。1970年のレコード大賞を受賞したこの曲は、菅原の最高傑作であるばかりでなく、当時人気モデルが妻子ある男に失恋し、睡眠薬自殺を図ったとき、エンドレステープにこの曲をかけて、聴きながら死ぬというできごとがあり、社会面の記事にもなった。

このような爆発的なヒットこそ以後乏しくなったが、強力な後援会が出来、彼のレコードは着実に売れる。しかし、一曲を吹き込むのに磨きに磨く歌い手であるゆえに、半世紀に近いキャリアを思えば、吹き込み数の少ない方だと思われる。

それに彼は珍しく他人のカバー曲をあまり歌わないひとである。しかし、その数少ない中で、石原裕次郎の「夜霧よ今夜も有り難う」をメインに

あいつ

ウナ・セラ・ディ東京

爪

赤坂の夜は更けて

おもいで

ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー

を収録したCDハーフアルバム「菅原洋一 夜を唄う」(1988)^{注)}は彼の真骨頂。大都会の夜の雰囲気を巧みに歌っている。これがアーバンライクでバタくさい、いわば日本風なシャンソンを目指しているのがわかるが、詳しくは後に具体的に検討・分析する。

デビュー35年目に、「忘れな草の記」というメモワールが書かれたが、45周年を迎えるも、スキャンダルはもちろん、大したエピソードもなく、律儀に孜々としてリサイタルで歌い、レコーディングをしているというくらいしか附記することはないだろう。芸能人らしい華こそないものの、着実な歌への愛情が今も聴くものを感動させ喜ばせている。得難い大歌手であると言える。その彼でさえ、一時萩本欽一のバラエティ番組のレギュラーに出たことがあるが、やはり、芝居の世界で言う“仁（にん）でない”ので、以後は歌一筋に戻り、もちろんいわゆる座長芝居もやっていない。これだけの経歴の人にはこれも珍しいことである。

今や彼の持ち歌のようになっているが、「忘れな草をあなたに」は、実は昭和39年の梓みちよ盤がオリジナルで、倍賞千恵子らも参戦したが、男声陣で掌中の玉を転がすようにこの作品を慈しんで、歌い続けた菅原が、圧倒的な歌のうまさで結局攫ってしまい、いつの間にか自分の歌としてしまって久しい。この根気と粘り、歌への深い思いが、歌手菅原洋一の全てなのである。(以下次号)

参考文献

- 菅原洋一「忘れな草の記」1997年 NHK出版
石原信一「おけいさん」1992年 八曜社
読売新聞社文化部編「この歌この歌手 上」1997年 教養文庫

注

「夜を唄う」(1969) のLP原盤は、次の全12曲がカバー物という、彼としては珍しいものであり、「知りたくないの」以後の方向にさまざまな試行錯誤を試みていることが分かる。

1. 夜霧よ今夜も有り難う
2. あいつ
3. 夢は夜ひらく

4. 東京ブルース
5. ふり向いてもくれない
6. ウナ・セラ・ディ東京
7. 女の意地
8. おもいで
9. 赤坂の夜は更けゆく
10. 爪
11. 銀座ブルース
12. ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー

後に『「湖畔の宿」「別れのブルース』服部良一作品集』(1973)という全曲カバー盤もある。

追記

ただ一つ、看過できない問題が彼のヒット曲「アマン」というデュエットの歌詞に存在する。まず、これはタイトルの *Amant* が、フランス語である点で、不自然な誤りがいくつか存在する要因になる。元来「アマン」なる語は情婦、愛人を意味し、男性の恋人は *amoureux* アムールー、女性の場合には、*amoureuse* アムールーズと言うのが普通である。何しろ色恋の国、もちろんこのほかにもいろいろあるが。

仏語を学ばれた方はもちろん、ラテン語系言語には、名詞に男性・女性の区別が厳存することはご存じだろう。

簡単な例で言えば、少年や男は男性名詞、少女や女は女性名詞である。従って、男の「アマン」はよいが、女性には語末に *e* をつけ、女性形 (*amannte*) とし、発音もアマントと替わらなければならない。だから、菅原がシルヴィアも園もひっくるめてアマンと呼ぶのは滑稽である。これではゲイ同士のラヴソングになってしまふ。

もう一点。ヒットに乗って第二部が出たが、この *deux* ドゥーというのも実は語呂はよいが間違いである。*Le second* ル・スゴンというのが多少古めかしいが正しく、それがいやなら、せめて *Le deuxième* ル・ドゥージエームとあるべきところである。

一般に英語の普及にともなって、さすがに目に余る誤りは減ったが、フランス語となると、どうしてこうむちゃくちゃになるのか、まったく不可解である。たかが流行歌に目くじら立てと笑う向きもあると思うが、そういういい加減さが万事に及ぶのである。作詞者はもちろんポリドールのスタッフに、仏語を習得したひとは多いはずであるのに、この始末である。大したことではないと、軽視するのは自分たちの仕事を自ら貶める行為である。大げさに言えば、リスナーを小馬鹿にしたようなこんな傲慢な振る舞いを繰り返しているうちに、流行歌はいつかどんどん衰微していったのである。猛省を促したい。

これは歌手菅原、生涯の唯一の汚点にもなるほどの、重大なミスなのであることを認識しなければならない。